

◇作家の田口ランディーさんが「お見舞いは現金と決めている」と書きだす短文があります。なぜ、現金なのかというと。ランディーさんが高校生のことです（ランディーはペーンネームできつすいの日本人女性）。要約して引用します。

◇「白血病で余命わずかと聞いた親戚の叔父を一人で見舞う。やせ衰え言葉も発せない叔父は、震える手でティッシュに五千円を包み、私に差し出す。こづかいをくれようとしているのだと気づいた。首を振つていらないと押し返すが、叔父さんも引つこめない。貰うしかなかつた。帰り道に泣けてしようがなかつた。無性に切なかつた。お見舞いには現金書留を送る。誰かを通じて天に返したいのだ。思い出すと今もありがたさに包まる」。

◇ランディーさんの結論。「誰かを通して天に返したいのだ」というのを仏教用語でいうと回向（えこう）といいます。まわし向けるわけです。ブーメランのように、投げると回転して元にもどつてくる。悪いものを投げれば、悪いものが返つてくるし、好いものを投げれば、好いものが返つてくる。そうはわかついても、ランディーさんの叔父さんは

正月の縁起物つて、言葉遊びというかダジャレと云うか。橙は代々で、昆布はよろこぶ、裏白は清らかで白髪まで長寿。長寿はいいのだが、きちんとゆずらないと。そこで、ユズリハの出番です。ユズリハって何？ 人工知能（A-I）に聞いてみました。

「常緑高木で、日本各地に自生し、庭木としてもよく植えられます。新葉が出ると前年の葉が後から落ちるため、葉を譲る＝子へ代を譲るという意味が民俗的に付与されました」



写真 千田完治

正月の作品／墨跡は、かくにんできていません」という回答。よう知らんけれど、A-Iは紙に印刷された本は読めないわけ。ということは、名著のほまれ高い、金田一春彦著『ことばの歳時記』（新潮文庫）をA-Iは知らないかも。この本の中に次のようないつたります。

（昔、ある高僧のとに年賀にやつてきた男が、家宝になるような縁起の良い墨跡をねだります。僧の書いた言葉が、「親死に、子死に、孫死ぬ」。正月から「なんでそんなことを書くのですか」と怒る男に僧いわく、「こんなえことはないではないか。逆になつたら大変なことだ」。

順序よくゆずつしていくからめでたい

逸話で町衆に慕わされました（お名前非はここでは問わない）。

そんな禅僧がユズリハをどう描いているか、知りたいと思いA-Iにふたたび尋ねたら、「ゆずりはの思想を、これだ、と端的に表している、確証ある仙

と決めている」と書きだす短文があります。なぜ、現金なのかというと。ランディーさんが高校生のことです（ランディーはペーンネームできつすいの日本人女性）。要約して引用します。

◇「白血病で余命わずかと聞いた親戚の叔父を一人で見舞う。やせ衰え言葉も発せない叔父は、震え

る手でティッシュに五千円を包み、私に差し出す。こづかいをくれようとしているのだと気づいた。首を振つていらないと押し返すが、叔父さんも引つこめない。貰うしかなかつた。帰り道に泣けてしようがなかつた。無性に切なかつた。お見舞いには現金書留を送る。誰かを通じて天に返したいのだ。思い出すと今もありがたさに包まる」。

編集後記

医師と知恵ある者です。「知恵ある者」というのが難しい。

◇おこづかいといえば、お年玉の季節です。幸いなことに身近にお年玉対応年齢の子どもや若者が多いくなつてしまつたけれど、わが身を思い出してみれば、小学校低学年の頃までは、紙幣でお年玉をいただくよりも、硬貨の方がうれしかつたな。

ペラペラの紙よりも、ずつしりと重い方が、いつもいたいたいような気になつて、満足感があつた。それが、どうよ。今は、現代の小学生でも、お年玉は現金だらうけれど、中学生以上になると、スマホの電子決済でお年玉が行き交うのであらうか。いやな世の中だね。なんて言うのは年寄りの証拠です。

んのように声も出ないほど衰弱しても、お小遣いをあげるなんてできないなあー。

◇『徒然草』百十七段は、兼好法師が良き友の三条件をあげています。その一番目が、「物ぐるる友」。つれづれなるままによしなしことを書いて、ゾーン（ものぐるほし）にはいつていた法師も、ものをいただくのはうれしかつたわけだけど、兼好は、もらつたものをまわしむけて、かえしていたのだろうか。

ちなみに、徒然草の良き友三条件の残りの二つは、ただくのはうれしかつたわけだけど、兼好は、もらつたものをまわしむけて、かえしていたのだろうか。

だいぶ前のことになるけれど、父親の年忌法要の

ために本堂へお参りした丁子さん。法要が終わつたあとで、少し深刻な顔で聞いてきました。

「今度、東京にある仏教伝道協会ビルのレストラントランに勤めようと思つていています。その協会は危ないところですか？」

私は笑いながらこたえました。

「だいじょうぶ、立派な組織だよ。たとえば、ホテルに『仏教聖典』という本が置いてあるの知らないかな？ あれは仏教伝道協会が作って寄贈しているんだ。日本語だけではなくて、英語はもちろんのことカザフ語、スワヒリ語とか何十もの言語に訳されているらしいよ」

それを聞いた丁子さんは安心して、仏教伝道協会ビルのレストランに勤務したようです。

ところで、仏教伝道協会は宗教法人ではありません。財団法人です。明治生まれの企業人・沼田惠範師（一八九七～一九九四）が、仏教普及をめざして設立した組織が今も活動しているのです。

以前は、こうしたこころざしをもつた企業人は数

多くおられたのですね（今もおられるけれど）。

でも、ここぞしがあつてもそれを認めない社会状況になつています。たとえば、長く続いた仏教の月刊誌が

数年前に休刊しました。発行を支援する企業が大企

業と合併して特定の宗教へ肩入れするのは、「ステークホルダー（企業の利害関係者）に納得してもらえない」というのが理由らしい。近代現代の篤志家

の心意気を許さない窮屈な社会になつています。

ところで、正月三が日の法要に参拝された方で、希望される方に仏教伝道協会作成の日めくりカレンダーをお配りしています。

先住職は檀家さん全員へ差し上げていただきました。カレンダーというのは、好き嫌いがはつきりして、しかも日めくりとなると、使う人は使う。使わない人は使わない。そこで、希望される方だけではなくて、希望される方だけに差し上げています。

このカレンダーが数年前からバージョンアップして素敵になつていて、ます。どう変わつたかといふと、まず、少し小さくなつたこと。次ぎに以前は一日一が異なることばと異なる絵との組み合わせだったのが、絵の変わりにカフー

写真になつたのです。

しかも、写真は一般から公募して入選者には賞金がいたげるらしい。例をあげれば、まん中にかかけたの写真のよう。

コンテストの講評には「真ん中に立つ白いサギがイメージに合つ。シンメトリー（対称）の構図も良く、色合いも白と黒と間のグレーで、グレーが全体的に中道という雰囲気を出している」とあります。おそらく、はじめに言葉を決めて、それにマッチする写真を選ぶのだろうけれど、言葉と写真の組み合わせが絶妙ですね。

いつも写真を使わせていただいている千田完治さんは以前、入選しました。ほかの方もふるつて応募ください。くわしくは「仏教伝道協会・カレンダー」で検索すればホームページにたどりつけます。

日々のなかに、
お見舞いは現金と決めている

つけた！
住職記